

灼けるような痛み忍の背が反りかえる。

たっぷり潤滑油にまみれていたが、未成熟の膣は軋きしむようによじれる。

忍の小柄な肢体に不似合いなほど太いペニスが、それでもゆっくりと膣を押しひろげながら胎内へと入ってくる。まるで熱い鉄杭に粘土を押し開かれるような拡張感に、忍はぎゅつと歯を食いしばって耐えた。

だが、刀也の侵入は、途中でなにか弾力があるものに妨さまたげられた。

それが処女膜であることを刀也は疑わなかった。

「お前……いいのか？ その、最初が俺でいいのか？」

忍は痛みで溢れた涙を浮かべたまま、小さくうなずいた。

「とつ、殿に差しあげるために……大切に守ってきたのです」

そつと微笑む忍にかける言葉が思いつかず、刀也は体を倒して唇を重ねた。

「忍、力を抜いて」

「……は、はいっ」

もう一度唇を重ね、刀也は内部で抵抗するものを一気に突き破った。

「痛ッ！」

ゴムが引きちぎられるような痛みが忍自身から発せられる。痛みによる緊張に膣が



引き締まるが、刀也は白い腰をつかみ、カリの先端を一番奥までねじこんだ。

「……殿を、殿を忍のなかで感じます。温かいです」

忍の内部は、熱い刀也自身に埋めつくされた。

「温かいのは忍だよ」

これまで感じたことのない安らかな感触と温かさが刀也のモノを覆う。身を起こして忍の股間を見ると、刀也のモノが根元まで刺さりきっていた。

とくん、とくんと膺が打つ鼓動と熱さに刀也は酔ってしまいそうだった。

「殿を感じます。……嬉しいです」

指で顔を覆う忍。大切な人にしか許さない秘密の部位に刀也を迎え入れ、彼女は嬉し涙を流した。

だが、これで終わりではない。挿入は儀式のはじまりにすぎなかった。

刀也は彼女の腰をつかみ、ゆっくりと腰を前後に動かしはじめる。

そのとたん、言葉にできない衝撃が刀也の全身に走った。

狭い膺は悦樂を生みだす魔法の通路だった。痺れはあつという間に逆流しはじめ、刀也の背中に電気の塊かたまりのようなものをつくりだす。

「熱い……本当に……入って……」

激しくなる抽送に、忍の大きな胸がふるんと上下に揺れる。

熱い塊が膣を押しひろげて差し貫くたび、忍の心に喜びが生まれる。

うっすらと浮かぶ汗と上気した肌が、忍を艶立つやだたせていく。

「殿……気持ちいい？ 忍のは気持ちいい？」

忍が、羞恥と快楽が混じった紅い顔を向ける。

「……ああ」

「嬉しいですっ……」

忍は悦びに震え、きゅうつとペニスを締めつける。

その膣圧に充血したペニスがこすりあげられ、刀也の欲望が昇りつめはじめた。

「そろそろ……我慢できない……」

刀也は一気に抽送の速度をあげ、血と蜜にまみれた肉棒を忍の奥に向かって突き入る。

「殿……ひうつ！ とのおッ！」

ペニスに腹を挟えぐまれ、忍は甲高かんだかい声をあげた。それは痛みではなかった。子宮口に刀也が当たるごつごつした触感が痒みを生み、忍に女としての悦びを与えはじめていたのだ。

忍はより深く迎え入れられるように、自分の両足を大きく開いた。

「あうッ……奥う、ゴリゴリしてえ……ッ！」

恥ずかしいと思う気持ちだが、さらに忍の気持ちを高ぶらせる。

言われなくても、忍の肢体が生みだす快楽の波に吞まれた刀也は、いっその快感を求めて奥深くまで犯した。

「くっ！」

刀也は喘ぎ、あごをあげた。まぶたの裏に走る閃光とともに、熱い液体と高ぶる欲望が出口を指して幹を駆けあがっていく。

「また太く……あうう……」

己を貫くペニスの異変に気づいた忍が指で顔を覆う。

忍を奥深く犯していたペニスが大きく反りかえり、腰が当たるほど深く挿入した瞬間に大きく爆ぜた。

「ひっ！」

子宮口から熱い液体を激しく打ちこまれ、牝芯が白く焼きあげられる。忍は肢体をブルブルと震わせ、腹の奥に感じる熱いものを悦んで受け入れた。

「……ああッ、あッ、あッ」